「残ったパン屑は十二籠！」（ルカによる福音書九章一～一七節）

1　退く

今日の聖書箇所、小見出しで言えば、「五千人に食べ物を与える」ですが、聖書の話として、一般にも知られているものです。イエス・キリストの、いわゆる奇跡として有名です。

この五千人の人に食べ物を与える、しかも五つのパンと二匹の魚で。この記事は四つの福音書全部に出ています。印象に残る話で、とくに教会学校では、よく取り上げられます。ただ分かったような分からないような、自分でも納得のいくような話しをしたことがないというのが本当のところです。

五つのパンと二匹の魚で、五千人もの人を、しかもこれは聖書自身が注意をうながしているように（一四節）、男だけで五千人です。ですからそれ以上の人がそこにはいたのです。その彼らすべてを「満腹」させるという、手品みたいなことが、どうして起こったのか、説明しにくいところです。

ただ今回、私どもルカによる福音書をつづけて学んでいる中で読んでみて、前後関係が、少なくとも私には前よりよく見えるようになって、少し別の角度から読むことができるような気がしています。私どもはどうしても、五つのパンと二匹の魚で、五千人の人を、という、このコントラスト（対照）に驚きながら、イエスのもつ神の力を理解するというようなことをします。別の角度からというのは、そういうところではなく、イエスによって召され、いよいよイエスと同じ宣教の業をにないつつある弟子たち、使徒たち、つまり、「十二人」、彼らの存在に注目しながら読んでみたいということです。

五千人の食事、これが起こったのは、ある日の夕方です。そこまでの状況を、最初の二節で確認しておきます。

> 使徒たちは帰って来て、自分たちの行ったことをみなイエスに告げた。イエスは彼らを連れ、自分たちだけでベトサイダという町に退かれた。群衆はそのことを知ってイエスの後を追った。イエスはこの人々を迎え、神の国について語り、治療の必要な人々をいやしておられた（一〇～一一節）。

宣教に派遣されていた使徒たちが、イエスのもとに戻ってきて、起こったことをつぶさに報告します。イエスはその彼らを連れてベトサイダという町に退かれます。ベトサイダはガリラヤ湖の北岸、カファルナウムから更に数キロ北東に行ったところにある港町、漁師の町です。

「退かれた」とありますが、これはイエスについて使われている場合は、宣教活動を一時中断して、祈る、休息するという意味で使われます。ここでは宣教から戻ってきた使徒たち、一二人を連れて、しばし退いたということです。

ところが、そのことが民衆に知られてしまいます。群衆はイエスと使徒たちをベト

サイダまで追いかけて行ったのです。この追いかけてきた人々をイエスは「迎え」ています。そして前と同じように、「神の国について語り、治療の必要な人々をいやして」いたのです。

ここに書いてある通りだとすれば、使徒たち、十二人は、すでに祈りと休息に入ったようですが、イエスご自身は、追いかけてきた人たちを、追い返したりせず、求めに応じて、この人たちにも前と全く同じく福音を説き、いやしをなさるのを止めませんでした。そのために、イエスの祈りと休息は、この出来事が終わったあとになされます。今日の箇所の次の段落、一八節に「イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた」とある通りです。

2　五千人の食事

先週から私どもはルカ九章に入っています。新しい事態として起こったのは、イエスの弟子たち、十二人が、たんにイエスについて行く、お供するだけの存在ではなくなった、むしろ使徒として「力と権能」を与えられ、イエスと同じく、神の国の宣教に送り出される存在として扱われるようになった、ということでした。それがよく果たされたことは明らかです（六節）。

それに応じて、使徒たち、十二人の在り方が、大きな主題として浮上してきたということを、先週私どもは確認したところです。イエスと共に神の国の宣教にたずさわる、それならイエスとはだれか、イエスと共に自分たちは何を、どのようになすべきか、強く問われることになったのです。その問いはつづいており、じつは今日の聖書箇所のテーマでもあるのです。

> 日が傾きかけたので、十二人はそばに来てイエスに言った。「群衆を解散させてください。そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つけるでしょう。わたしたちはこんな人里離れた所にいるのです」。しかし、イエスは言われた。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」。彼らは言った。「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません。このすべての人々のために、わたしたちが食べ物を買いに行かないかぎり」。というのは、男が五千人ほどいたからである」（一二～一四節）。

「日が傾きかけた」。これだけでは、季節がはっきりしないので、いま何時ごろかは分かりません。しかしイエスの話が、すでにかなり長時間に及んでおり、これからも相当つづくことはうかがわれます。「十二人はそばに来て」。みんなの総意だったのでしょう。群衆をいったん解散させてくれるようにイエスに願い出、それが合理的な判断、また方法だと進言します。

これに対するイエスの答えは、木で鼻をくくるという言葉がありますが、非常に冷淡なものでした。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」。「あなたがたが」に強調があります。何よりイエスは、十二人の提案の無責任さを指摘しているように思います。よく考えてみてください。「わたしたちはこんな人里離れた所にいる」。な

るほどそこには店も人家も何もない。しかし彼らはこうも言っているのです。「周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つけるでしょう」。この人里離れたところは、じつは周りの村や里から遠くないのです。それなら、なぜ君たちが、そこまで行って買ってこないのか。むろんこのイエスの問いかけには無理があるかも知れない。しかし十二人の責任逃れを指摘するには十分です。

責任逃れよりもっと大きな問題がここにはあります。それは、ひと言でそう言ってしまうのがいいかどうか分かりませんが、不信仰です。思い出していただきたいのは九章三節です。イエスは彼らを宣教に遣わすに当たってこう命じていました。

旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も、二枚は持ってはならない・・・（九・三）。

なるほどこのイエスの命令は、十二人のここでの態度を、一面で正当化するもののように見えます。つまり私たちはいま何も持っていないのです。「パン」も「金」も持っていない。私たちはパンを買いに行くこともできない。行かないかぎり、配ることもできないと。しかしイエスのあの命令とはそういうものだったのでしょうか。どんなときでも、神が助けてくださる、神に全き信頼を置きなさいという意味いがいではなかったはずです。

そのことをどこかに忘れてしまっているがゆえに、彼らには、男が五千人という越えられない壁のような現実に対して、自分たちがあまりにも無力に見えるのです。「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません。この「わたしたちには」も、先ほどのイエスの言葉の中にあった、「あなたがたが」という言葉に対応する形で、強調されています。

こうなってくると、この五千人を、パン五つと魚二匹で食べさせ、かつ満腹させたという奇跡は、ほかでもない、まさに宣教へと遣わされた彼ら十二人のためになされたもののように見えてきます。

イエスの弟子たち、十二人の使徒こそ、イエスとはだれか、知らなければなりません。メシア（キリスト）とは、どのような方か、そしてこの方を救い主として伝えるべく立てられた、むろんそれに相応しいわけではないけれども、立てられて、遣わされた私たちは、どのような存在であるのか、どのような歩みを為すべきか、それが問いとして浮かび上がってきます。

3　荒れ野のマナ

さてイエスが、五千人の食事を用意し、満腹させたときのことを、改めて確認いたしましょう。

イエスは弟子たちに、「人びとを五十人ぐらいずつ組にして座らせなさい」と言われた。弟子たちは、そのようにして皆を座らせた。すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟

子たちに渡しては群衆に配らせた（一四～一六節）。

ここで弟子たち、十二人は、五十人ぐらいずつ組にして座らせ（五千人は途方もない数ですが）、パンを群衆に配ることです。基本的には何もしていない。イエスの奇跡の準備の手助けです。

五つのパンと二匹の魚を取って、イエスが、天を仰ぎ、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちによって配ること、このことで、私どもは、最後の晩餐や後の教会の聖餐式を思い起こしますが、そこまで考えなくてよいと思います。敬虔なユダヤ人が食前にしていたこと以上ではないと言われます。ただ「天を仰ぎ」、これは尽きなかったパンの出所を暗示しています。神からの、天からのパンです。それがどのような状況でも私どもの命を養い、私どもに生きる力を与え、豊かにしてくれる源なのです。

五千人の食事の出来事、聖書を振り返れば、神が共に歩んだイスラエルの歴史を振り返れば、私どもはいくつかの同じ出来事に出会います。その一つは、何と言ってもモーセに率いられ、エジプトを脱出したイスラエルの民が、四十年、荒れ野を彷徨（さまよ）ったとき、毎日マナによって養われたことです（出エジプト一六章）。彼らは毎日夜明けと共にマナ採集し、それで一日を暮らしたのです。必要な分は必ず与えられます。余分にとって残しても、夜を越すと腐ってしまします。それは神を信じ切れない者のすること。荒れ野に水は湧き（イザヤ三五・六）、天からのパンによって養われます。今日の箇所一二節「人里離れた所」は、荒れ野と訳される言葉です。列王記には、預言者エリシャのもとで起こった、同じような、食べきれず残すことになったパンの話があります（下四・四二以下）。今日は取り上げませんので、どうぞ後で聖書で確認してください。

私どもは、ルカ五章に伝えられた、ペトロの召命の記事を思い起こしてもいいと思います。夜通し漁をしても何も取れなかったペトロ、イエスの、沖にこぎ出し網を降ろせとの言葉に従うと、網が破れそうになるほど、舟が傾きそうになるほど大漁になったことです。十二人は、そのことを忘れてしまったのでしょうか。イエスは、私どもに、霊においても肉においても、必要なものを与えてくださる方、豊かに与えて下さる方です。この方と共に私どもは神の国の宣教を担っているのです。私どもの持っているもの、それが、五つのパンと二匹の魚「しか」ないとしても、それをも祝福し、本当に、だれにも、五千人だれにも、分け隔てなく与えてくださり、養ってくださる救い主なのです。

先ほど、この五千人の食事は、弟子たち、使徒たち、十二人のためになされた、と申しました。そのかぎり、教会のために、私ども一人一人のキリスト者のためになされたことです。その観点からすると、最後の節はとても暗示的です。「残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった」（一七節）。今日の聖書の元々のテキストでは、この「十二」がじつは最後の言葉です。印象深く終わっています。この「十二」、これは十二使徒のことを暗示しているように見えます。籠が一杯になった、残ったパンは一二籠にもなった。十二人はこれを見て、自らの不信仰を、それを越える恵みを、ここで確信したはずです。荒れ野で、私どもを養ってくださる神。五千人の食事は使徒たちに忘れられない出来事となったのです。

（九月五日）